

星と幼子の物語～未来少女、混沌の街に挑まんとす～

chee

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ヒーローとヴィラン、正義と悪。

何もかもが起こりうるこの街で、少女は何をなすのか。

これは、かつてヴィランに命を救われた少女の時を超えた成長の物語である。

本作は「小説家になろう」様にて連載されている硬莉菜様の小説「シヤングリラ・フロンティアくソゲーハンター、神ゲーに挑まんとすく」の二次創作作品となっております。作中にて原作設定を説明なく用いることがありますので、原作様を一度読まれてからご一読されることを推奨します。

また、原作設定との矛盾点などがありましても二次創作だからと割り切っていただけだと嬉しく思います。

作者はこの小説が初執筆小説となります。読みにくいことも多いでしょうが、お付き合いくださいると幸いです。

1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
64	60	56	50	46	40	34	29	23	17	11	6	1

目次

# 1話

今日も町は騒がしい。

ヴィランとヒーローが戦っているという光景は一見すると非現実的であるがその町の住民からすれば見慣れたものだ。

ここはケイオースシティ。全能存在ギャラクセウスの力の届かない唯一の街であり、超常の力を持つ者の集う街。

「ほんつと最近、物騒になったよなあ」

「この町に住む以上は覚悟の上だろうが」

「そうは言っても怖えもん怖えだろうが」

そんな街では最近、とある話題が多くの住民の不安を駆り立てている。

『ヒーロー・ヴィラン連続襲撃事件』

最近、新手のヴィランが現れるようになったという噂を聞く。噂によれば、こいつは相手がヒーローかヴィランかは関係なく特別な力を持った人に襲い掛かるらしい。

そして、彼と戦った多くの戦士は彼についてこう語る。

「アレは本当にただのヴィランなのか？確かにこの街には特殊な力を持つ輩が多くいる。しかしアレは特別だ。あの機械仕掛けの体は一体この世のどんな理論に基づいて設計されたのだろう。それこそ未来からの刺客と言われたほうが納得できるというものだ」

~~~~~

ソイツが現れたのは突然だった。

いつも通りの会社からの帰り道。ソイツは唐突に僕の前に立ち塞がった。僕は流<sup>ミューティアス</sup>星の名を持つ、超常の力を授かったヒーローの一人である。そんな僕の目の前に現れたその怪しげな何者かに警戒心を抱きながら、僕はソイツに問いかける。

「僕に何の用かな？」

「お前を倒しに来た。それだけだ」

・・・意味がわからない。

「なぜ？」

「理由……なんでもいいだろ。ヴィランなんてそんなもんだ」

この手の奴は稀にいる。俗に言う戦闘狂という部類の奴らだ。コイツもその類の奴なのかもしれないが、正直今まで会った奴らとは違うと感じる。不気味さが段違いだ。

「じゃあ最後に、君は何者だい？」

「何者でもいいだろ。ただ、俺たちはこれから戦う。それだけわかれば十分だ」

「上等ー」

やはり訳がわからない。ただ、僕がコイツの標的になっ**て**いるという**こ**とだけはわかる。戦うのは避けられないようだ。僕の体が蒼い光に包まれる。光の中から現れたのは、全体的に白系のスーツに要所を守る金色のアーマー、五芒星の形をしたゴーグルが装着されたフルフェイスの覆面。

ヒーローティアスの姿だった。

一瞬の静寂が流れる。

「最初から全力だあ!!!『スターロード』!!!」

全力で一步を踏み出す。光と音をまき散らしながら宙に舞う。『スターロード』はヒーローティアスに変身している時に使える技の一つで五秒間空中を駆けることができる。地面を、壁を、そして空中を踏みしめて、三次元的な軌道でヴィランに接近する。小回りこそ聞かないが、そのケイオースシテイのヒーローの中でもずば抜けたスピードはヴィランに反応の隙を与えない。すさまじい速度で懐に潜り込み、その勢いのままヴィランを蹴り飛ばす。

「吹っ飛べェ!!」

蹴りを喰らったヴィランは大きく後ろに飛ばされながらも正面にブラスターを構えるが、反射的に横に飛び、虚空を蹴って横からヴィランに突っ込み、そのままわき腹を殴り、ひるんだところを投げ飛ばす。

「まだまだア!!」

建物の壁にたたきつけたヴィランに勢いをつけて飛び蹴りを決め、回し蹴りで横に大きく吹っ飛ばす。ここまでで五秒。ヴィランの鎧はすでにボロボロ。しかしその不敵な笑みからはいまだに余裕がうかがえる。全く持つて不気味だ。

「やっぱ速えな、ミーティアス。」

「そりやどうも。降参するなら認めるが?」

「遠慮しとくよ……………『加速する蹂躪』」

ミーティアスは再び駆け出す。左右に揺さぶりをかけながら、再び懐に潜り込み、アツパーを繰り出す。当たれば脳震盪を確実に与えられるその圧倒的速さの一撃を、いなされる。

一度距離をとり、今度は右から掴みかかろうとして、弾かれる。そのまま足を払おうとして、かわされる。顔面を殴り飛ばそうとして、横から腕を掴まれて逆に投げ飛ばされる。

「急に対応速くなりやがって……………!!」

「まだまだ俺は余裕だが?」

「調子に乗ん……………グウア!」

唐突に脇腹に蹴りを入れられる。反応こそはできたが、十分なガードは間に合わなかった。

「僕はア… 負けない!!!」

後退しつつも機を伺い、一瞬で間合いを詰める。

「流星は、堕ちないんだアア!!!」

鳩尾めがけて全力の一撃。受け止められてしまうが、そんなことは想定済みだ。そのまま慣性を殺さずに相手に掴みかかる。とてつもなく癪な話ではあるのだけれど、アイツの技を借りさせてもらう。

「大時波!!!」

大時波。アイツは身の周りのものを鎧として取り込むが、たまに古い武器防具を取り込んで過去の戦士の技をコピーすることがある。コレもそんな技の一つらしい。アイツは全身に取り込んだタイヤの回

転やら重心制御やらを駆使して技を使うが、僕の場合は自慢のスピードで無理矢理再現している。ちなみにオリジナルであるウエ…ナントカとかいう戦士は持ち前の身体能力だけで技を使っていたらしい。どんな化け物だよ。

「調子に乗るなあ!!」

さすがのコイツも抵抗する間もなく地面に叩きつけられる。追撃をかけようとするも、即座にブラスターを構えられ、一時退避。距離を取る。

「オラオラア!!」

復帰したヴィランが即座に距離を詰める。逃げるように距離を取り続けることは可能だが、それではなんの打開にもならない。隙を作ろうと攻撃を捌き続けるが防戦一方になってしまっている。

「まだまだ続くぞお!」

「!..... 厄介な...!」

..... これ結構しんどい。

拳と蹴りを捌きながらもブラスターの弾は避けなければならない。しかし、焦っているのか物理攻撃が減ってブラスターによる射撃が増えてきた気がする。

..... まだ、まだ、..... ここだ!!!

ブラスターの弾をギリギリのところを翻すように躲し、一気に距離を詰める。

「喰らいやがれえ!!!」

その体を殴り飛ばす。しかし、奴は吹っ飛びながらもブラスターを構える。それに気づいたときにはもう遅い。

「負けて... たまるかあ!!!」

バアン!!

銃声にも似た音が鳴り響き、奴のブラスターから放たれた小球が僕の足に着弾し..... 弾けた。

「ハア... ハア... 危なかったが、ここまでだ...」

「クソがア...」

一分にも満たない攻防の末、地に伏したのは、僕だった。

足が動かずに横たわる僕。その視界に映っているのは、  
全身の装備が既にボロボロになっているヴィランと、  
その手に握られて僕に照準を合わせるブラスタートと、  
突如その背後に現れた謎のワームホールの中で赤く光る斧を振りか  
ぶっている金髪の少女だった。



## 2話

ふと、思い返すことがある。

喧騒に包まれているケイオースシティ。

私がまだ小さかったあの日、

危険だとも知らずに戦場に迷い込んだ私を、

ミーティアスから、

ゼノセルグスから、

身を呈して私を守ってくれた、

“おじ様”

彼はヴィランではあったのだけれど、

私にとっては間違いなくヒーローで、

実際にヒーローになった今の私にとっても、

永遠に憧れのヒーローなんだ。

ただ、彼の力になりたくて、

彼を縛る呪われたの牢獄の鍵を開けたくて、

私は、

ロックピツカーローになったのだ。

~~~~~

代替品の実験体  
リフィルと呼ばれた男がいた。

ユグドライアを始めとする改造人間。その実験段階における大量の失敗作のうち、奇跡的に命をつないだのが彼だった。嘗ての青年の面影は既になく、PSYボーグ・ロードを彷彿とさせるその機械に蝕まれた体は悲哀すら感じるものがある。彼は誓った。強くなると。二度と“替えの効く実験サンプル”なんて呼ばせない。そうして彼は、一人のヴィランとなった。

ここは、とある研究施設の最奥の部屋。私は、ロックピツカーヒーローとしてこのヴィランと戦っていた。

「諦めなさい。もうすぐ私との通信を追ってたくさんのヒーローが援

軍に来る。あなたに勝ち目なんて残ってないのよ」

「援軍が来る？ 関係ないね。どの道俺はもうこの世界から消えるんだ。何人ヒーローが集まろうが知ったこっちゃねえな」

「何の話をしているのかしら」

「新米ヒーローなんかにはわかる訳ねえだろ。文字通りお前らとは次元が違う話だ」

ソイツの言っている事は理解できない。しかし、コイツのこの余裕っぷり。本能が「警戒を怠るな」と伝えてくる。

「じゃあ、さらばだ」

「だから何を言って……………!!!」

突如、ソイツの背後で空間が裂ける。呆然とする。何が起こっているのかわからない。何も言えぬままソイツが空間の裂け目に飲み込まれて行くのを見送ってしまった。

『…おい！ ロックピッカー！ 何があった!!』

通信機から仲間の声が聞こえてくる。しかし、目の前の光景が衝撃的すぎて全く耳に入ってこない。

「……………わからない……………」

『どういうことだ！ 奴はどうなった!?!』

「……………消えた…………… 飲み込まれた。ナニカに……………」

『何を言ってるんだ！ もう少しわかりやすく……………』

「私！ 追います!!!」

『待て!! 落ち着くんのだ!!』

もう静止は聞けない。

本能が叫ぶ。『アイツを追うのは危険すぎる』と。

本能が叫ぶ。『アイツを絶対に放っておいてはならない』と。

私は、アイツを追って、一步を踏み出した。

~~~~~

既に通信機からは何も聞こえない。通信は途絶したようだ。周囲には何も見えない。まるで周りには何もないというように。そして目の前には扉がある。

扉の奥に見えたのは……誰かに言われなくてもわかる。私の故郷。嘗てのケイオースシティだ。扉の向こうに見える景色が私の思い出の景色と重なって胸が高鳴る。

しかし、扉の向こうでミーティアスと戦っているソイツ、この時代にいないはずの奴が嫌に目につく。

「アイツはその街に居ていい奴じゃない。速く連れて帰らなきゃ」  
早くこの街に入りたいが、そうも行かない。この閉ざされた扉を開かなくてはならない。だが任せてほしい。鍵開け職人<sup>ロックピツカー</sup>にはお手の物なのだ。

扉が開いた。素早く斧を取り出し、目の前で横たわるヒーロー<sup>ミーティアス</sup>にトドメを刺さんとするリファイルに向かって全力で振りかぶり、勢いよく振り下ろす。

「お前え……」

完全な不意打ちだった。だが、これで倒せるとは最初から思っていない。なんとか回避したりファイルだったが、肩に斧があたり、結果的に腕を奪うことができた。

「どうやってここまで来た!!」

「あなたを追ってきただけよ」

「それで時空の狭間に入れても『鍵』無しで出てこれる訳がないだろ!!」

「あら、鍵開けは得意技なのよ」

「ふざけるな……今は退くがお前はもう絶対に許さん。生きて未来に帰れると思うなよ!」

「逃さないっ!!」

逃げるアイツを即座に追おうとする。しかし、『加速<sup>アクセル</sup>する蹂躪<sup>セイル</sup>』を使ったリファイルに追いつけるはずもなく、呆気なく逃げられてしまう。

「ミーティアスさん!!」

急いで倒れてるミーティアスさんに駆け寄る。

「大丈夫ですか??すぐに病院へ運びます!案内してください!」

「待つて!!その前に、君は何者だい?」

「私は「ロックピッカー」。事情は移動してから説明します!」

そう言つて私は、彼を背負つて歩き始めた。

場所は変わつて郊外の病院。ここは「嘗てユグドライアに襲撃され、それ以降使用されなくなった廃病院を医者でありヒーローでもあるDr. サンドルフオンがヒーローの拠点かつ治療所として活用している場所」らしい。

「…………というわけで、アイツを倒すのに協力していただけないでしょうか?」

私は知っている全てを話した。私とリフィルが未来から来たこと。リフィルがとても危険な存在であると言うこと。そして、未来のためにも、この時代のためにも、アイツを倒す必要があること。

「彼女の言うことはにわかには信じがたい話ではあるが……ミーティアスはどう思う?」

「僕は実際に襲われたわけだからね。彼の本当の目的はわからないけど、彼が危険だというのも事実だろう。『連続襲撃事件』のこともあるしね」

「出会つたばかりの私を信用できないのは仕方ないことだと思いません。しかし、アイツが危険だということだけは信じてほしいんです」  
「ああ。そこはわかった。他のヒーローたちにも警戒しておくように伝えておこう」

サンドルフオンさんは私のことも信用ならぬだろうが、ひとまず納得してくれたようで一安心だ。そしてミーティアスさんが思っていたように聞いてくる。

「ところでロックピッカーちゃん……だっけ?君はこれからどうするんだい?」

「逃げたアイツの拠点を探しに、街の散策に行こうと思います」

「それなら、気をつけたほうがいい。もうすぐ奴が現れる」

「奴……ですか?」

「ああ。僕の宿敵…………カースドプリズンだ」

カースドプリズン

その名前を聞いて、嘗て私の命を救ってくれたそのヴィランの名前を聞いて、思わず胸が高鳴る。

「大丈夫ですよ。これでも私も、未来ではヒーローやってみましたから」  
そう笑って見せて私は病院を後にした。

リフィルの行方を搜索するため。

もしかしたら「おじ様」と再開できるかもしれないと、ほのかに期待を寄せながら。

### 3話

「よし。ひとまず治療は終わったぞ。とはいえ、絶対安静だがな」

「ありがとう、先生」

D.T. サンダルフォン

先生はそう言っただけで僕の背中を叩く。確かに、戦いの直後は一切動かなかった足が多少痛みはするものの十分動くようになっていく。「安静とは言っても、奴が現れたら僕は行かないよ。先生」

「ダメだ。その状態で戦うのはあまりに危険だ」

「そんなのは承知の上だよ」

「お前の気持ちもわかる。いつもなら確かに怪我を覚悟で送り出したかもしれん。多少の怪我なら私が直せばいいんだからな」

実際、先生のこういうところには何度も助けられている。先生は程よく無理をさせてくれるし、その結果怪我を負って、治療してもらったことも一度や二度じゃない。

「だが今回はいつもと違う。例のリファイルとかいうヴィランのこともあるし、そもそもあのロックピッカーという少女すら信用できる保証がない。二人がグルという可能性もあるしな」

「確かに、その通りかもしれない。でも、僕が彼女に助けられたのは事実だ。もし二人がグルなら、あそこで僕を助ける意味がわからない」  
それにもう一つ、気になることもある。

「ちなみに先生、カーストプリズンの名前を聞いたときの彼女の顔は見た？」

「ああ。私にもあの顔の意味はよくわからなかった。一体何を思っただけのあの表情なんだろうな。」

「彼女のとアイツの間には間違いなく何かがあると、僕は思う……」  
そして、なぜかこれだけは言い切れる。

「……そして、それは悪いものじゃないんだろうな」

先生の呆れ顔に、僕は笑みを返す。

「あんなに傲慢でワガママな奴がそんな関係を築く相手がいるっていうのは本当に驚きだよな」

アイツの意外な一面を見た気がする。  
案外悪い気分はしない。

~~~~~

私は街を歩いている。目の前に広がる景色は間違いなく思い出の中の景色のソレで、この街の中にいるという事実だけで心が踊り、それでいて感慨深い。

元々どこに向かっていたわけでもない。だけど、足は勝手にそこへ向かっていった。そして、実際にその建物を目の前になると様々な思い出が溢れてくる。

「ふふっ……」

窓から中を覗くと満面の笑みで栗きんとん味のアイスを食べていた小さな女の子に母親が笑顔を向けていた。その微笑ましい光景が思い出と重なって、思わず笑みがこぼれる。

中には入れない。そもそもこの時代の人間とあまり関わるべきではない。時間逆行の影響がどんな形で現れるかわからないからだ。でも、この光景を一目見ることができただけで十分だった。

「バイバイ。頑張って生きてね」

一言呟いてその場を立ち去る。さて、次はどこを歩こうか。その足は嘗て行きつけだった駄菓子屋へと向いていた。

……………

栗きんとん味のアイスが食べたいな。

そんなことを考えながらのんびりと街を歩いていた。気を抜けば思わず鼻歌がこぼれてしまいそうなほど、この街の散策は心が踊る。あと少しである駄菓子屋が見えてくるはずだ。そんな時、どこかから爆発音が聞こえてきた。まあこの街ではよくある事だと思い、歩を進めようとするが、

高笑いが聞こえた。

思わず振り返ってしまう。

胸が高鳴る。

だってそうでしょう。

鮮明に思い出せる。

その声は、  
その声の持ち主は、  
嘗て自分の命を救った救世主で、  
私の憧れのヴィラン<sup>ヒーロー</sup>なのだから。

「……………おじ様!!」

思わず走り出す。声はそう遠くない。大まかな方向と距離は把握している。公園を走り抜け、交差点を曲がり、ビルの間を抜け、目の前の開けた工事現場の一角で、

<sup>ブリクステンブレイク</sup>  
「脱獄!!」

ずっと追いかけていた緋色の凶星が、光り輝いているのを見た。

~~~~~

俺様は常に自分のやりたいように生きてきた。その結果この呪われた牢獄の鎧を着せられる羽目になったが、後悔はした事がない。

俺様が好き勝手にしているというだけで、「ヒーロー」という立場を盾にして俺様に難癖をつけ、喧嘩を売ってきた輩が腐るほどいた。全員返り討ちにしてやったが。あいつらはバトルスタイルがパワー型の俺様と戦うために馬鹿の一つ覚えでひたすらパワーをつけて俺様に挑んだ。そういう奴らはスピードとテクニクで返り討ちにしてしまえばいい。そうすれば敵わないと悟って俺様と関わらなくなる。だが、コイツだけは違った。

ミーティアス

コイツは俺様と戦うたびにどんどん速くなっていった。〃僕の武器はこのスピードなんだ〃 このスピードで僕はお前を倒すんだ〃と主張するように。

面白かった。

コイツは今までの奴らとは違う。だから、コイツが現れると、この先にある戦いに、この先にある俺様の成長に、ワクワクしてしまう。

「よオ。来ると思ってたぜ。ミーティアス」

「当たり前だよ。お前が現れてるのに僕が駆けつけないわけないじゃないか」



「迷惑な話だな」

「お前が街の人たちに迷惑をかけないなら、僕も戦う必要はないんだけどね」

「俺様は俺様のやりたいようにやるだけだ。他の奴らなんて関係ねえ」

「じゃあ今日も僕がお灸を据えてあげよう」

「面白え。やってみろ」

今日の舞台は工事現場か。なら、コイツらを使ってやろう。

近くにあつたクレーンを吹き飛ばし、その先にあつたトラックまるごと破壊する。

「今日の衣装だ。楽しみやがれ」

右腕には射出可能フックを装備。左手にはトラックの積荷を模した大盾。足装備はキャタピラ。タイヤよりも小回りが効かないが不安定な地形に強いため、この舞台に向いているとも言える。そのタイヤは膝に装備。なるほど。これは面白い活用ができそうだ。名付けるならカースドプリズン『重機カスタム』ってところか。

重機カスタムを身にまとい、変身したミーティアスと向き合う。お互いに何も言わない。緊張感が走る。

「行くぞ!!カースドプリズン!!」

身構える。今日はどこまで速くなっているんだろうか。ミーティアスが拳を引き、素早く距離を詰めてくる。

「遅え」

パンチを片手で受け止める。足のキャタピラが広い面積で凹凸のある足場を捉え、体を支える。この程度じゃ微動だにしない。

「どうしたよ。ミーティアス。俺様をナメてるのか?」

「そんなわけ無いだろ!!」

やっぱり遅い。確かに一般人から見れば速い動きなのだろうが、ミーティアスはもつと速いはずだ。

ミーティアスを投げ飛ばし、右腕のワイヤーフックでロケットパンチ。ミーティアスは体をひねってそれを躲すが、一瞬体が硬直する。

「オラア!!」

躲されたフックを奥の鉄骨に引っ掛けて、そのままワイヤーを巻き取り、ジャンプをして急加速。膝のタイヤを全力で回転させて飛び膝蹴りを当てる。

「何のつもりだ？」

おかしい。明らかに遅い。遅すぎる。今の蹴りだってミーティアスなら躲せたはずだ。

「『スターロード』!!!」

ミーティアスは素早く距離を詰め、手間で跳躍。俺様の真上で天地さかさまに虚空を蹴り、真後ろに着地してすぐに回し蹴りを放つ。だが、やはり遅い。その蹴りを盾で防ぐ。

「だから遅エんだよ!!」

俺様のパンチに合わせて後方に跳ぶ。そのまま虚空での踏み込みから切り返しの飛び蹴りが飛んでくるが、盾で防ぐまでもない。横から足を掴んで投げ飛ばす。

「遅え。遅すぎるぞ。ミーティアス！」

「余計なお世話だ!!」

直線的な飛び蹴り。確かにさつきよりは速い。だが、まだ遅い。盾で防ぎ、払う。そのまま足を掴んで吊るし上げると、そこには、大きな火傷と傷跡があった。

「ふざけんな。こんな状態で勝てると本気で思ってたのか」

「怪我がなんだ。そんなので諦める程僕は軟弱じゃない!!」

「諦めなければ俺様にも勝てるとでも思ってたのか？調子乗んじやねえ!!」

足を締め付ける手に力が入る。

「アアアアアア!!」

頭が冷えていく。

魂が冷めていく。

そこにもう戦うまでの高揚感や期待感はない。

苛立つ。苛立つ。苛立つ。苛立つ。苛立つ。

とつさに盾を構える。数瞬遅れて何かが盾を穿つ。

盾の向こうを覗くと、そこには無粋にも横槍を入れやがった銃らしきものを構える機械野郎が一人。  
俺様の中で、プツンと、何か、キレた。

## 4話

俺様は、ナメられるのが嫌いだ。だから、足を怪我して最速が出せない状態で挑んで来た馬鹿ミーティアスが腹立たしい。

俺様は、実力を誤魔化す奴が嫌いだ。だから、正面から戦おうとせずにあえてミーティアスと戦っている最中を狙って乱入してきた屑機械野郎が腹立たしい。

俺様は、気分の高揚しないことが嫌いだ。だから、この馬鹿と屑の二人を前にして殺気すら湧いてくる。

「テムエ………つまんねえ事すんじやねえかよ。覚悟はあるんだろ  
うなア………」

「覚悟なんていらねえなあ。お前に勝てばいいだけだろう？カースド  
プリズン」

………随分とナメてくれるじやねえか。

「俺様は今虫の居所が悪い。やりすぎても文句を言ううんじやねえぞ  
！」

掴んでいたミーティアスを放り捨てる。足を抑えてうずくまっ  
ているが………どうも怒りで拳を握る力を入れすぎたようだ。どのみち  
コイツは邪魔だからちようどいい。ミーティアスが復帰不能なこ  
とを確認し、機械野郎と向き合う。

「オラア!!!」

ワイヤーロケットパンチからの飛び膝蹴り。さつきと同じ攻撃だ。  
一度見てるはずの攻撃。横に跳んで当然のように躲されるが、そのま  
ま両膝で着地。両膝のタイヤでドリフトをするように方向転換、両手  
で全身を支えてキャタピラの大質量で蹴りを入れる。

「どうした口だけかあ?！」

吹っ飛んで行く機械野郎にワイヤーフック射出。足に巻きつけ、大  
きく振り回してから壁にぶつける。録に抵抗もできていない。

「煩えー！黙れ！『加速する蹂躪!!』」

突如、コイツの動きが早くなる。攪乱しながら接近してくる。だが

しかし。

「確かに速え。だがなあ、俺様だって速さ自慢の馬鹿ミーティアスと散々戦ってたよ。それだけじゃあ通用しねえなあ!!」

四方八方から放たれるブラスターを的確に盾で捌いていく。

「良い気になるなよカースドプリズン!!!」

唐突に懐に潜られる。しかしコイツの近距離火力は大したことがない。ブラスターにさえ気を配れば問題はない。そう判断してコイツのブラスターに目をやってようやくやく気づく。武器がそれまでと変わっていることに。

気づいたときにはもう遅い。その大きな口径を持った特殊な銃のようなもの、小さい大砲と言ったほうがしっくりくるソレはもう発射準備を終えていた。

「喰らいやがれ!! 『冥土の宴』!!!」  
ヘル・ファイエスタ

腹に直接その巨大ビームを受けた俺様は派手に吹っ飛ぶ。思えば、今日初めてまともに攻撃を喰らった。

いいねえ! いいじゃねえか!!

戦いの興奮が帰ってくる。

「ハハッ!!なんだよ! いいもん持ってんじゃねえか!! もっと見せやがれ!!!」

そうして笑みを浮かべて立ち上がる。

「ハッハッハ!! 俺様も付き合ってるからよお! ギアを上げていこうぜえ!!」

せつかくだ。見せてやる。

『脱獄』!!!  
プリズンブレイク

呪われた牢獄の鎧が弾け飛ぶ。中から現れたのは緋色の凶星と謳われた俺様の真の姿。奴の顔が引きつる。そう、ここからは一方的だ。

例えどんなに加速していようと俺様のほうが速い。

「行くぞオラア!!」

「なッ! 速……!!」

一瞬で距離を詰め、反応する前に殴り飛ばす。奴が愕然とした顔で

宙を舞う間に俺様も跳躍。奴の反対側にある鉄骨の山を踏みしめ跳び、空中で蹴り落とす。

「クソ……ガアア!!」

よろめきながらも立ち上がるが、次の瞬間には超速の飛び蹴りが脇腹を穿つ。ふつとばされながらも奴がブラスターを連射するが、全てが外れる。確かに俺様はさっきまでその弾道上にいたが、一瞬もあれば移動など容易い。

「まだまだ行くぞお!!」

すぐにまた近づき、パンチの連打、連打、連打。確かにやつも速い。多少の反応もできているようだが、全然足りない。半分も捌けていない。

「クソオ!!」

殴られながらの必死のパンチを片手で軽く捌きつつ、奴の首に回し蹴りを当てる。

「ガア……」

「終わりだ」

体の硬直したコイツを絡め取るようにサブミッションを決めつつ後ろに回り込み、後頭部に肘を打ち下ろす。

「負けて…… たまるかあ……」

口は動くが体は動かない。

「まあ、悪くはなかったぜ。」

「クソオ……クソオ……」

30秒経過したのか、俺様の体を鎧が再び包み込む。

「でも、でも、絶対にただではやられない!! 『咎人の末路』!!!」

コイツの手に持った謎の端末の発する光が俺様を包む。ダメージはない。

「……何をした……」

「この技は本来、武器を『固めて』どんな高性能武器もただの鈍器にしちまうっつー技なんだが、今回はお前の鎧の鍵穴を固めた。つまり、お前はもう、『脱獄』プリズンブレイクを使えないんだよ!!! ざまあみろ!!!」

そう言い残してコイツは突如現れた謎の穴の中に消えていった。

「厄介なことをしてくれやがったなあ。この借りは必ず返すぜ」

~~~~~

目の前で緋色の閃光が走る。思わず目を奪われるが、その視界の隅に見知った顔を見つけた。

「ミーティアアスさん!!」

足を抑えて蹲っている。見てみると、治療の跡が見られるものの、さらに悪化したように見える。

「なんでこんな無茶をするんですか!!」

「アイツが現れたんだ。無理もするさ」

「おじ様は強いんです！万全の状態じゃないのに挑むなんて無茶ですよー！」

ミーティアアスさんを担ぎ、戦場からの被害を受けない、しかしその様子を眺められる場所へと運ぶ。

「……ねえ、なんで君はアイツのことを『おじ様』って呼ぶのか、聞いてもいいかい？」

その質問を聞いてハツとする。そうだ。おじ様は私にとってはヒーローでも他の人にとってはただの迷惑なヴィランなのだ。

「昔……と言っても未来から見て昔のことですけど、私はこの街に住んでいました。まだ小さかった私は、危険だとも知らずに戦いの場に迷い込んだことが何度かあります」

「それじゃあまさか……」

「はい。おじ様は、私のことを戦いの中で、二度も、身を呈して守ってくださいました」

その時、ミーティアアスさんの顔が一気に青ざめる。

「まさか、あの時の、金髪の女の子は……」

ミーティアアスさんは私のことを覚えてくれたらしい。しかし、相当気にしていたのか、絶望でもしたかのような態度に申し訳なきが溢れてくる。

「はい。確かにそれは私です……でも、そんなに気にしないでください！あれは私の責任ですし！ミーティアアスさんを恨んだことは

一度もありません!!」

「だからといって、僕はヒーローとして許されざることを君にしたんだ。いくら謝っても謝るだけじゃ足りない!!」

「いいんです！いいんですってば!!そういうことならリフィルを捕まえるのを手伝っていただければ十分ですから!!」

思わず叫んでしまう。実際、私は一切気にしていない。むしろ、私が迷惑をかけてしまったのだと思っている。

「そうか。じゃあ僕は君のために、絶対にリフィルの奴を捕まえるよ約束しよう。まあ現在進行形でカースドプリズンの奴にボコられるけどね」

「アハハ…」

確かにその通りだ。これだとミーティアさんは別で何かさせろとせがんでくるんじゃないや…

「だけど、あの手のやつは必ず『保険』を用意しているもんだ。緊急脱出手段くらいは用意しているんじゃないか？少なくともどんなにダメージを負ってもこの場からは逃げおおせる。だからこそ、絶対に僕が捕まえてみせるよ」

すごい。そこまで見抜いているのか。やはりこの人のヒーローとしてのヴィランを見る目はすごい。

「この件以外でも僕にできることがあれば何でも言ってくれ。何よりも優先して君の頼みに答えよう」

「……ありがとうございます」

そう言っていると、戦いも終わったらしい。リフィルがワームホールを作り出して逃げていった。そして、

おじ様と、目が合う。

おじ様は私とミーティアさんを一瞥して呆れたような目をしてる。

「おい。ミーティアス。今日は今までで一番つまらなかったぞ」

「ハハ、それは悪かったね」

ミーティアさんが震えている。確かに、この状態でおじ様に襲われてはひとたまりもない。しかし確信があった。おじ様はそんなこ



とはしない。

「フン。俺様は興が冷めた。もう帰らせてもらう。お前も情けなくガキンチョ背負われて帰るんだな」

「そうさせてもらうよ」

目を見開く。おじ様は私のことを「ガキンチョ」と呼んだ。嘗ての小さかった私を呼ぶのと同じように。まさか、おじ様は私の正体を一目で見破ったというのか。

「いやまさかね」

「どうしたんだい？」

「いえ、なんでもありませんよ。とりあえず病院に戻りましょうか」

いろいろ悩むことはある。でも、おじ様と再会できたというだけで少し足取りが軽くなった。

## 5話

「この馬鹿者!!絶対安静と言っただろうが!!」

「あ痛ア!!」

「ア、アハハ…」

場所は例の病院。案の定と言うべきか、当然と言うべきか、ミーティアスさんは相当な無茶をしていたようだ。

「今度こそ絶対安静だ！今日明日ベッドから出られると思うな!!」

「ハハ… サンドルフオンさん、お手柔らかに…」

「いいや、ここは徹底的にやらんといかん。ほらミーティアス！こんな女の子にここまで心配させて恥ずかしくないのか！お前は！」

「いや仕方ないだろこれは… つて痛い痛い!!」

さつきまで戦場にいたからか、こんな光景すらも微笑ましく感じる。

「ロックピツカーだったな。ミーティアスからいろいろ聞いたよ。今回はこの大馬鹿者を助けてくれてありがとう」

「いえ、とんでもないですよ！」

「そもそも、君はコイツに殺されかけているわけだろう？本当に、よく助けてくれたよ」

「あー。勝手にその事まで話したことがまずいなら謝る。でも、これで先生も完全に君の事を信用してくれると思っただからさ」

「全然問題ないですよ！その話で信用が得られるなら願ったりですよ！」

本心だ。この話をしてミーティアスさんが責任を感じてしまうのは嫌だが、別に私としては嫌な記憶というわけではない。むしろ戦場の危険性をよく教えてくれるいい教訓だ。

「君も折角この時代に来たんだ。カースドプリズンの奴でも訪ねてみたらどうだ？話したいことでもあるだろう？」

「でも、おじ様がどこにいるのかわかりませんよ？」

「安心していいよ。奴の拠点の場所ならわかってる」

え？おじ様ヒーローに拠点バレてるの?!

「ハハ。驚いているようだね」

「いくら僕たちでも直接拠点に乗り込んだりはしないよ。超常の力を使って襲撃したんじゃヴィランと同じだからね。現行犯逮捕が基本なんだよ。まあ、拠点に違法な何かを隠し持っていたりすると話は別だけどね。アイツは基本武器は現地調達だからガサ入れする必要があるほど武器を溜め込んでいるわけでもないしね」

「ナ…ナルホド」

「というかそれで安心して拠点使い続けるおじ様もおじ様だと思う…」

そんなことを考えているとサンダルフォンさんがメモを渡してくれる。

「このメモ通りに行けば奴の拠点だよ」

「……ありがとうございます」

この時代に来たときはそう都合よくおじ様に会えると思っていなかったし、あっさりとおじ様の居場所がわかってしまつて拍子抜けだ。

右手の中のメモを見つめる。

今まで懂れていただけの相手に自分から会いに行けるのだ。なんだか不思議な感覚がする。

「私、行ってきますー！」

「ああ。行ってらっしゃい。何かあればまたこの病院に来なさい」

「はい!!」

そうして私は病院を飛び出した。

『おい栗<sup>ガ</sup>きん<sup>キ</sup>とん<sup>ン</sup>幼<sup>チ</sup>女<sup>ヨ</sup>、邪魔だからあっち行け。ママがお前を探してるぞ』

『いい子だ、後ろを振り向かず真っ直ぐに走れ』

『オジチャン……まあいいや』

これは初めておじ様と会ったときの記憶。

『っしやあ!!』

『俺の手は……勝利を掴む!!』

『集えゴミ共!!』

これが二度目の記憶……我ながら相手にされなさすぎて少し悲しい。

『脱獄!!』

『フン。俺様は興が冷めた。もう帰らせてもらう。お前も情けなくガキンチョ背負われて帰るんだな。』

これが、さっきの記憶。普通はガキンチョなんて呼ばない歳であろう私をガキンチョと呼んだおじ様は、やっぱり私が昔助けた少女の未来の姿だと気づいたのだろうか。

だとしたら、少し嬉しい。

そんなことを考えていたら、もうついてしまったらしい。街の郊外にある廃ビル。その一室におじ様はいる。

扉はない。壊したのだろう。隣室の扉をみると、おじ様が鎧を纏っていたら通れないサイズだ。

「お邪魔します」

一声かけて中へ入る。そして、憧れの人物と目があつた

「誰だ…… お前か」

少しの沈黙が流れる。目はお互いをじっと捉えている。

「俺様になんの用だ」

「ただ、おじ様に会いたかっただけ。ところでおじ様、私が誰か、気づいていたんだよね?」

「ああ。それがどうした」

やはりそうだ。おじ様は気づいていたんだ。

「どうして気づいたのか、聞いてもいい?」

「……まず、あの機械野郎だ」

「リファイルのこと?」

「名前は知らねえ。奴の能力はあまりに一貫性がない。それはおそら

く奴の能力が奴自身じゃなく奴の装備によるものだからだ」

確かにその通りだ。だが、それが何だというのだろうか。

「だが、今の技術じゃそんなのは作れない。それこそ未来の技術だ。奴は何かしら時間や空間を移動する能力を持っている。奴の逃げ出し方が証拠だ。これで、奴が未来人だという予測がついた。これだけだと到底信じられねえけどな」

ここまでおじ様の言うことはすべて事実だ。

「だが、お前の斧もその類の武器なんだろう？俺様はこの世のあらゆるものを武器として扱う。だから金属にはある程度の知識があるつもりだが、お前の斧に使われている金属は見当がつかねえ」

「確かに、この武器は未来でも最先端の技術で製造された金属を使っているけど……」

「だろうな。機械野郎のこともあつてこれでお前も未来人だという予測がついた」

「最後の決め手が、さっき会った時だ。お前は俺様と初めてあったにもかかわらず一切警戒しなかったな。俺様が危険なヴィランであるにもかかわらずだ。それに、目が合った時にあんな顔されちゃ初対面なわけがねえって誰でも一発でわかる」

……どんな顔してたんだろう。恥ずかしい。あ、今もちよつと顔赤いかも。

「未来から来たお前の過去、つまり、お前よりもちっこい金髪で女のガキで、俺様が何かしてやったのなんて栗きんとん幼女<sup>チヨ</sup>だけだ。今後俺様がそこらのガキを助けてまわるつもりもねえから同じ条件のガキはいねえ。つまりお前が栗きんとん幼女<sup>チヨ</sup>なんだろう」

啞然とする。それだけのヒントで私の正体を見破ったのか。

「うん。私が、前におじ様に助けてもらった女の子だよ。改めてお礼を言わせて。二度も、私の命を救ってくれて、ありがとうございました」

深々と頭を下げる。

ずっと言いたかったこと。この人にお礼が言える日が来るのをずっと待っていたんだ。心の底からの感謝を伝える。

「礼なんていらねえよ。俺様は俺様のやりたいようにやっただけだ。お前の命なんて興味ねえ」

「それでも、私は救われたんだもん。感謝くらいさせてよ」

おじ様に微笑みかける。おじ様はなんだか気恥ずかしそうにしていて、お礼を言われなれていないのがわかる。ちよつとかわいい。

「私ね、今、ロックピッカーって名乗ってヒーローをやっているの。おじ様に憧れて、人を助けようと思って」

「……俺様に憧れるならヒーローになるなよ」

「いいんだよ。私にとつてはおじ様もヒーローなんだから。それで、私は鍵開けが得意なの。今はまだ未熟だからできないけど、いつかおじ様のその鎧の鍵も開けてみせるから！」

これは自分自身対する宣誓でもある。絶対におじ様を助けるんだ。私の力で。

「余計なことはすんじゃねえ」

「え」

「俺様はお前の力なんかいらねえ。俺様自身で全て解決してやる。だから余計なことはすんじゃねえ」

さつきまでとは違う強い言葉。それを聞いて気付かされる。

……あのおじ様だもん、私が鎧の鍵を開けたところで喜ばないよね。

長年の決意を否定されたのに、あまり嫌な気持ちはしなかった。

「用が済んだなら早く帰れ」

「そうだね……ところでおじ様、私未来から来たばかりで宿も決まっっていないんだよ」

「…帰れ」

「…わかった」

非常に残念であるが、これ以上おじ様に迷惑はかけられない。扉まで歩き、振り返る。

「また来るね!!」

「もう来んな」

絶対に来よう。

この時代に来て良かったと心の底から思えた。

## 6話

あれから一晩たって、私は再びおじ様の家を目指している。その手に大量のアイス（栗きんとん味）を引っさげて。

結局昨日の晩は病院の一室に泊めさせてもらった。病院のベッドは流石に寝心地が良かったが、未来ほどではなかった。そもそも私は寝心地のいいベッドは落ち着かなくてあまり好きじゃない。それこそ、硬い床の方がよく寝れたりする。おじ様の家の寝床とか……いや、決しておじ様の家に泊まりたいだけってわけじゃない。まあ泊まりたいけど。

とか考えてたら着いた。

「おじ様〜こんにちは〜」

返事はない。まだ寝ているのだろうか。もう昼なのに。

中に入ると、おじ様は留守のようだ。誰もいない。アイスを一本取り出し、残りは冷蔵庫をお借りして冷やしておく。

……っていか何この冷蔵庫。中身ほぼないじゃん。おじ様の食生活どうなってるの？

おじ様帰って来ないかな……。とか思いつつ時間を潰している。昨日はドタバタしてたし夜も疲れててすぐに寝ちゃったのもあって落ち着いていられる時間ってこつちこの時代に来て初めてだ。

色々なことを考える。向こう未来に残してきた人たちのこと。帰ったら怒られるだろうな……。っていか私帰れるのかな？時間移動手段を持っているのはリフィルだし。倒しちゃったら帰れないじゃん。倒さずに捕まえたところでアイツが私達が帰るために使うとも思えない……。やっぱ帰れないじゃん。そりゃこつち過去で十数年過ごせば必然的にあつち未来に行くわけだけどき、それはなんかちがくない？

「……何してんだお前」

そんなことを考えてたらおじ様が帰ってきた。

「おじ様もアイス食べる？冷蔵庫にたくさんはいつてるよ」

「そういうことを言ってるんじゃないやねえよ空き巣犯。勝手に俺様の家に入って何をしてんのか聞いてんだよ」



空き巣犯とは失礼な。やってることはたしかに同じかもしれないけど。

「鍵をかけないおじ様が悪いんだよ」

「お前は鍵をかけても開けるだろうが。得意なんだろう？ 鍵開け」

…… 覚えててくれたんだ。

「流石にわざわざ鍵を開けてまで忍び込むほど常識欠けてないよ、私」

「人ん家に勝手に入るやつには常識なんてねえだろ」

そう言いつつもおじ様はアイスを一本取り出す。

「美味しいでしょ」

「クソ甘え」

甘いのいいじゃん。っていうか文句言いながらも食べるんだ。

「おじ様、冷蔵庫なんにも入ってなかったけど大丈夫なの？ 食生活」

「どうでもいい。まあそこらへんのやつから奪えばいいさ。俺様はヴィランだ」

「でもおじ様はそんなことはしないでしょ？」

おじ様はそんな何の理由もなしに人を傷つけるようなヴィランじゃない。…… と思う。小さい私を助けてくれたり、昨日だつて人のいない工事現場を戦場にしたり意外と他人のことを気にしている。

「お前が俺様を語るな。不愉快だ」

「やだ。私おじ様のこと話すの好きだもん」

…… あ、めっちゃ睨まれてる。

「っていうか話そらさないでよ。食生活、食生活」

「うるせえお前には関係ねえ」

「もー、そんなこと言つて弱つてミーティアスさんにコテンパンにされても知らないよ」

「俺様はそんなことじゃ弱くなんねえし弱つたところであんな奴には負けねえ」

「そんなこと言つてないでさ。ほら、何なら私にご飯作つてあげるからさー」

うわーすごい嫌そうな顔。流石にちよつと傷つくよ。

「とりあえず材料買つてくるからさ。何食べたい？」

「いらねえ。早く帰れ」

「やだよ。適当に食材買ってくるからね」

「いや… 帰れよ…」

部屋を出ていく私に何か言っているが無視だ無視。とりあえず食材の買い出しに行こう。

~~~~~

「何を作ろうか…」

場所は安全区の大型食材売りのコーナー。安全区とはケイオースシテイの郊外にある一帯のこと。ここに入るために厳重なチェックが必要になる。セキュリティがあまりに厳重すぎる代わりに、街のどの施設がヒーローとヴィランの戦いで被害を受けようと安全区に通うことで復旧までの間やりくりできるようになってる。

「あれ、ロックピッカーちゃん」

振り向くとそこにはミーティアさんがいた。

「どうもです。ミーティアさん、怪我はもう平気なんですか？」

「ああ。もう問題ないよ。先生の技術はやっぱり凄いからね。まる一日寝てればどんな怪我でも治っちゃうんだよ」

それは本当に凄い。サンダルフォンさんは未来の最先端医療と同じレベルの医療をすでに確立しているようだ。

「それで、君はここに何を買いに来たんだい？」

「ちよつとおじ様の食生活が想像以上に心配で、手料理でも振る舞おうと思ひまして」

「ハッハ。なるほどね。アイツに手料理ねえ。アイツの食生活を心配する人なんて始めてみたよ。案外、こんなことをきっかけに優しい心が目覚めたりしてね」

私の手料理を食べて優しく微笑むおじ様… 無いな。でもあつたらいいなあ。

「ハハ… おじ様に限ってそんなことないとは思いますがね」

「だよ。僕もそう思うよ。でも、アイツの心は誰かが支えてやる必要があると思うんだ。そして、それは君であるべきだと、感じてなら

ない」

おじ様の心を支える。その表現が妙にストーンと落ちてきた。おじ様の孤独な日常に、その殺風景な心に、私が彩りをもたらすことができたならば、それはどんなに素晴らしいことだろうか。

「いいんですか？ヒーローのミーティアさんがヴィランのおじ様を支えてくれなんて言って」

「いいんだよ。たしかにアイツは僕の宿敵だが、最終的にはアイツも救ってやりたいと思っている。……いつか平和になった世界で改心したアイツと酒を呑み交わしながら、『こんな戦いがあったな』なんて笑い合うのが夢なんだ。変だろ」

「変なんかじゃないです」

即答する。当たり前前だ。そんないい世界。私も見てみたい。

「ありがとう。そう言ってくれると嬉しいよ。アイツは確かに迷惑極まりないヴィランだが根の部分までが腐りきっているわけじゃないんだよ。ヴィランの中には平気で関係ない人を爆殺するような外道もいるけど、アイツは今まで一人も人を殺したことがない。そんな奴の心が悪だとは僕は言い切れない」

やっぱりこの人はおじ様のことをよく見ている。ただの宿敵ってだけじゃない。例え敵であっても本当におじ様のことを心配しているんだろう。それに比べて私はどうだ。自分の敵の<sup>リフィル</sup>ことをちゃんと見ていたのだろうか。きつと、答えは否だ。私もこの人のようにもつと人の根の部分を見れるようにならなきゃいけないな。

「そうだ。ハイドロハンズの奴がリフィルの潜伏場所らしき場所を何箇所か見つけたと言っていたんだ。場所は南と西の郊外にある今は使われていない研究施設だ。予定では明日突撃するのだが……」

「私も行きます」

これは未来から来た私の役目であり、役目を関係なしにしてもきつと今の私には必要なことなのだ。もう一度リフィルと顔を合わせて、話を聞いて、心までも見る必要がある。ミーティアさんに気付かされた。

真剣な顔を向ける私にミーティアさんは微笑む。

「そう言うと思っていたよ。僕たちは南の担当。西はハイドロハンズとアムドラヴァが担当してくれる。準備をしておいてくれ」  
「わかりました」

少し肩に力が入る。リフィルが南にいてくれればいいが。

「突撃は明日なんだから。今は力を抜きなよ。そういえば、カースドプリズンの奴は前に戦闘中に『早く帰ってクリームシチューが飲みたい』とボヤいていたことがあったよ。奴の好物なのかもしれない。作ってやるといい」

え?! おじ様の好物?! それはいい事を聞いた!!

「じゃあ僕はそろそろ帰るよ」

「あ、はい!! ありがとうございます!!」

彼の背中を見送る私は、不思議と肩の力が抜けていた。

~~~~~

「ただいま」

結局ミーティアさんの助言通りシチューの材料を買ってきた。

「おじ様」

あれ、おじ様いないじゃん。どこいったんだろ。

とりあえず買ってきた材料でシチューを作り始める。

「~~~~~」

思わず鼻歌が漏れる。ってあれ? これは、夫の帰りを待つ妻シチューでは? 私は妻より娘ポジをこそ望みなのです。

とりあえずシチューが出来上がる。おじ様は帰って来なかった。このまま待ち続けたいのは山々だが、明日は私も突撃に参加するから休まねばならない。一旦帰るしかなさそうだ。……いやそりゃこのままここで寝泊まりしたいけどさ? おじ様と話したら寝れなさそうじゃん。

「じゃあ、また来るね」

誰もいない部屋に一声かけて帰路につく。部屋では鍋から湯気が上がっていて少しいい匂いが漂ってきた。

## 7話

「じゃあ、作戦を確認しよう」

場所は病院。私とミーティアさんは向かい合う。ハイドロハンズさんとアムドラヴァさんはすでに西の研究施設へと向かっているらしい。

「作戦と言っても大したものじゃないけどね。まずは二人で突撃。途中で邪魔が入った場合、極力無視が好ましいがどちらか一方が先に進めそうなら君が進んでくれ」

「わかりました」

「目指す場所は最奥のコントロールルーム。ここからは建物内の全てのコンピュータのデータにアクセス出来る。きつと何か情報をえられるだろう」

「そうですね。どんなデータが出てくると思います?」

「そうだな... 奴の武器に関する情報が出てくれば素晴らしい。あとはまだに謎に包まれている奴の目的に関する計画書のような何かがあればいいな」

「そのあたりに関しては同じ未来人の私が知っていれば良かったんですが...」

「別に構わないさ。僕たちだってこの時代のヴィランについてそこまですべて知っているわけじゃない」

「そう言ってくれると助かります」

「気にしないでいいよ。さあ、行こうか」

そう言って私達は病院を出る。周囲に細心の注意を払いながら街を南下する。そしてそこにその建物があった。

「ぱつと見何も無いように見えますね」

「とは言っても警戒を怠っちゃ駄目だよ」

「わかっています」

そつと二人で入り口に近づく。

「鍵がかかっているね」

「なら、私に任せてください。鍵開けは得意技です!」

この時代

こつちに来てから初の見せ場だ。ついつい張り切ってしま  
う……張り切つてピッキングするとかまるでヴィランみたい  
じゃん。

「ハハ。ピッキングが得意技ってなんだかヴィランのようだね」

「ぐう……」

自分でもそう思っただけに否定できない。

「それで、開きそうなのかい？」

「はい。複雑な構造をしてはいますがこれならすぐですね」

「複雑？」

「この鍵穴、鍵穴一つにつき三つの鍵が連動してるんです」

ミーティアさんが頭にはてなマークを浮かべている。

「長い鍵を用意して、手前三分の一を入れてひねると鍵がさらに奥に  
進めるようになるっていう仕組みを二段階組み合わせたものですね。  
見たことないという鍵でもありません」

ミーティアさんが呆れ顔。珍しいな。

「未来では、ヴィランの拠点とかでたまに見る形ですね。技術者の支  
援で最先端技術を使うヒーローに電子ロックは無意味ですから」

「へ……へえ」

いけないいけない。ちよつと語りすぎてしまったか。お、開いた。

「開きました！」

「ありがとう。それじゃあ合図を出したら一気に扉を開け放つ。用心  
してくれ」

「わかりました」

ミーティアさんは腰を低くして集中し、私は防火斧を正面に構え  
る。

「3……2……1……」

「ゼロ!!!」

バアアアン!!!!

扉が吹き飛ぶ。ええ、扉を開けるって言いながらぶつ壊しちやっ  
てるじゃん。苦笑いがこみ上げてくる。

たつぷり数十秒。その場で周囲を警戒するが、何かが起こる気配は

ない。

「何も出てきませんね」

「ああ。慎重に中を進もう」

私達は中に入る。最近まで使われていた形跡が見られるものの、誰かが潜んでいる気配は感じられない。何にも遭遇せずに目的のコントロールルームへとたどり着いた。

「また鍵がかかっているな…… ロックピッカーちゃん、もう一度お願いできるかい？ 周囲は僕が警戒しておこう」

「あ、はい」

どれどれ。次はどんな鍵穴のかな……… 電子ロックじゃん。

「電子ロック……… 斧の出番ね!!!」

「ええ?!?!」

いや、そんな驚かなくてもいいじゃん。

「電子ロックは専門の道具があれば簡単に開くんですけど、この時代には持つてきてないんですよ。申し訳ないです」

「いや、いいんだよ。僕が扉を壊した時点で穩便になんて終わりようがないんだからね」

「それもそうですね。じゃあちよつと下がっててください」

「わかったよ」

斧を構える。そして持ち手の部分を捻ったり捻ったりボタンを押したり。

ガシャン!!ガシャン!!ガシャコン!!!ウィーーン……

突如大ききの増した斧が赤く光り輝く。

「セエエイツ!!!」

ドオオオン!!

爆発を伴って扉が崩壊する。下手に扉を吹き飛ばすと中のコンピューターが心配なので、扉を粉々に破壊した。これで中のコンピューターも無事なはずだ。

「開きましたよ……… ってあれ? どうしました?」

呆然としているミーティアさん。

「い…… 今のは何なんだい?」

「ああ。【防火斧・超破壊モード】ですよ。すごい威力ですよね」

「ああ。確かにすごい威力だ」

「……………なんですか」

若干引いているようにも見える顔に抗議の視線を飛ばす。

「まあいいです。それより、開きましたよ」

「ああ。この巨大なコンピュータから全てのデータが調べられるはずだ」

目の前にあるのは今もなお稼働している超巨大コンピュータだ。手前のコンソールから操作できるらしい。ミーティアさんがさつきからいじっている。

「とりあえずデータバンクにアクセスしよう何か保存されているかもしれない」

モニターに突如大きなウィンドウが開く。これがデータバンクなのだろう。データの更新時期はここ数日に固まっていると思ったら急に数年前まで間隔が空いていた。

「おそらくこの最近のデータがリフィルの持ち込んだものだろうね」  
とりあえず一番上のデータを開く。

「これは…あいつの武器？」

見覚えのないデバイスの数々の中に見たことのあるものが混じっている。

「加速する蹂躪…これか。奴が急に早くなったカラクリは」

『【加速する蹂躪】・リフィル計画における人体改造によってリフィル素体が体内に獲得した神経系にエネルギーを流し込むことによつて常人を遥かに凌ぐ運動能力、反射神経、思考速度を手に入れる。発動中のリフィル素体は認識速度が跳ね上がり、常人と比べて約三倍に引き伸ばされた世界に生きることとなる。』

「何……………コレ……………」

「リフィル計画、リフィル素体。アイツと間違いなく関係があるだろうね。見進めよう」

『【冥土の宴】・リフィル素体が人体改造によって手に入れた神経系を直接接続することによつてこの小型レーザー砲から超出力の粒子



砲を放つことができる。エネルギーは内蔵されているものを用いるが、直接リファイル素体の持つ特殊生命エネルギーを流し込むことも可能。』

「これ、カースドプリズンの奴が喰らってたビームのことだな」

「え、おじ様これ喰らってたんですか？」

「ああ。ちょうど君のくる直前だったよ。奴は鎧を着込んでいたから耐えたけど、中々の出力のように見えたよ。僕たちだったら耐えられなかっただろうね」

ミーティアさんはスピードを活かすために一切の防具は着ずに回避前提で戦う。私も小型に変形させた斧を持って立ち回る戦闘スタイルなので防具は最低限だ。そんな私達がその攻撃を受けたらと思うとゾツとする。

『インプリズメント 咎人の末路』・リファイル素体の特殊生命エネルギーをこの端末を通して変質させるとあらゆるデバイスの機能を封じるエネルギーとなる。封じられた武具はその効果の一切を使えなくなる。』

「おじ様が最後に受けていたのはこれですね」

「ああ。これのせいで奴は今『プリズンブレイク 脱獄』ができなくなっているんだらう」

その後も武器一覧を眺めるが、見知った武器は出てこなかった。武器意外のデータを漁っていると、ミーティアさんがとある記録を見つけた。

『特殊生命エネルギーに関する考察』

リファイル | No. 45

俺の体はリファイル計画に耐えられなかったようだ。もうすぐ命が尽きるだろう。その前に俺の生きた証としてこの記録を残す。もしこの計画に耐えきり、超常の力を得たリファイルがいるのなら参考にしてほしい。

俺達の体に施された人体改造。その基本は新神経系と特殊生命エネルギーの二つに尽きる。その特殊生命エネルギーとは一体何なのか。超常の力をもたらすエネルギーを蓄えておくもの。この表現を聞いて俺の中に思い浮かんだのが、今は手に入らない希少鉱石、ウル

トクリスタル”だ。嘗てのケイオースシティにおいて戦いの場に稀に唐突に出現するものらしい。この鉱石手に入れたヒーローやヴィランはどんなに消耗した状態であっても、多くのエネルギーを必要とする超常の力をたちまち行使したという。俺達にもたらされた特殊生命エネルギーの正体はウルトクリスタル由来のエネルギーなのではないだろうか。ケイオースシティにはこのエネルギーを収納する物質があったと聞く。”ケイオースキューブ”だ。このキューブの改良版が俺達の体に埋め込まれたと考えられる。これが俺達の力の正体だったのだ。

もし、人体改造を受けて生き延びたりファイルがいて、この記録を読んでいるならば、過去の世界へ行け。そしてケイオースシティで多くのウルトクリスタルを手に入れる。そうすればお前は最強だ。二度と理想論者の科学者共に虐げられることはない。』

「なるほどね。これがファイルの目的だったわけか」

「そうみたいです。それにしたって……」

「ああ。『リファイル計画』。なんとなく全貌がみえてきたな……胸糞悪い。おそらくこのデータが正式な記録だろう見てみるかい？」

ミーティアさんはそれらしきフォルダにカーソルを合わせる。

「ええ。見ましよう。きつと、見なければならぬんです」

私の言葉を聞いて、ミーティアさんはフォルダを開いた。

## 8話

~~~~~

### 【リファイル計画】

本記録は過去のヒーロー・ヴィランを参考にして行われた超常の力に関する研究を元に、人体改造によって超常の力を一般人に後天的に与えることを目的とする計画の記録である。

注) 以下ではリファイル計画における人体実験サンプルを「リファイルNo.〇〇〇」と記すものとする

本実験の流れを大まかに記す。

- 1 新神経系の埋め込み
- 2 特殊生命エネルギーの埋め込み
- 3 調整

実験結果を以下に記す。

リファイルNo. | 1

新神経系を組み込むも拒否反応あり。鎮静家に失敗。組み込んだ部位から順に体が腐り、死亡。

リファイルNo. | 2

部位を変えて新神経系を組み込むも拒否反応あり。鎮静化に失敗。組み込んだ部位から体が腐り、死亡。

リファイルNo. | 3 | 1 | 9

同様に部位を変えつつ新神経系を組み込むが拒否反応あり。鎮静化に失敗。それぞれ組み込んだ部位から体が腐り、死亡。

リファイルNo. | 2 | 0

脊髄に直接新神経系を埋め込む。拒否反応はあるものの非常に小さく、鎮静化成功。しかし、体全体に繁殖する過程で衰弱。死亡。

リファイルNo. | 2 | 1 | 5 | 9

リファイルNo. | 2 | 0と同様に新神経系を埋め込み、拒否反応の鎮静化に成功。しかし、やはり繁殖の過程で衰弱。いずれも死亡。

リファイルNo. | 6 | 0

リファイルN○|20~59と同様に新神経系を埋め込み、拒否反応の鎮静化に成功。やはり繁殖の過程で衰弱するものの全身への定着に成功。特殊生命エネルギーの組み込み実験においてエネルギーが体内で暴発し、死亡。衰弱死を回避した要因は新たに導入した鎮静薬物によるものと思われる。

リファイルN○|61~78

リファイルN○|60と同様に新神経系が定着。しかし特殊生命エネルギーの暴発により死亡。原因は新神経系との過剰反応によると推測される。

リファイルN○|79~127

リファイルN○|60と同様に新神経系が定着。定特殊生命エネルギーの組み込みを行わず、ごく少量を経口摂取し、様子を見た。約半数が一週間で死亡。残りの内の約半数は二~三週間で死亡。生き残ったのはリファイルN○|103のみだった。

リファイルN○|103はその後も安定。調整段階に移行。最終的に完全なエネルギーの安定化に成功。

直後、リファイルN○|103は暴走。改めてリファイル計画の危険性が再確認された。リファイルN○|103は関連研究素材と研究者のほとんどを破壊、殺害して逃走。これを持ってリファイル計画は凍結されたものとする。

~~~~~

「なるほど。この計画におけるリファイルN○|103が僕たちの知っているリファイルでN○|43の遺言に従ってこの時代に来たというわけか。胸糞悪い話だよ全く。吐き気がする」

「本当ですね。本当に、ひどい話です」

「替えの効く実験体...それでリファイルか。嫌な名だな」

リファイルの事を思ってみる。彼が何をされて、何をしてきたのかを。

「確かに、リファイルは可哀想だと思います」

実際に、リファイルのことは可哀想だと思っただけど...

「それでも、リファイルはこの時代に来て、ミーティアさんに、おじ様に、ひどいことをしたのも事実です。だから、私はリファイルを倒します」

ミーティアさんは少し驚いたように目を見開き、すぐに笑顔を向けてくれる。

「ありがとう。僕も同じ考えだよ」

「なんでミーティアさんがお礼を言うんですか？」

「君がそう考えてくれるなら、また一緒に戦える。僕も心強いからね」

「……こちらこそ、ありがとうございます。ミーティアさん」

これからリファイルとどんな戦いをするにしても、きつとこの人はずっと側で力になってくれる。それがすごく心強かった。

「さあ！調査を続けようか！」

そう言いながら開いた画像は、ケイオースシティの地図だった。ところどころに×印がついていて、とある郊外のスタジアムの一箇所だけ○印がついている。

「この印、何なんでしょうか……」

一切心当たりがない。ウルトクリスタルの発生は場所には関係なかったはずだ。

「わからないな……いや、待てよ、何かが思い当たる気がする……過去に大きな戦闘があった場所……ウルトクリスタルじゃない……ケイオースキューブか!!!」

ケイオースキューブ！確か考察に書いてあったウルトクリスタルのエネルギーを貯め込むためのデバイス！

「ケイオースキューブは発生場所と密接にリンクしていて一定距離以上持ち出すと消滅する特殊な物質なんだ」

じゃあもしかして……

「つまり、リファイルの奴はこの建物を拠点にしている可能性が高い！」  
「そういうことだ！」

よし！これですぐにも突撃できる！

「ここから見られる情報はこれで全部みたいだね。とりあえず一旦帰って情報を共有しよう」

「わかりました」

十分すぎる情報が得られた。ハイドロハンズさんやアムドラヴァさんの方はどうなったのだろうか。

「… ああ… うん、分かった。こつちも中々の情報が手に入ったよ… うん。病院で合流しよう。それじゃ」

電話を終えたミーティアさんが振り返る。

「西に向かった二人も何かしらの情報を得たようだ。病院で合流することになっている。戻ろう」

「はい！」

そうして私達は大きな情報と小さな決意を胸に、研究施設を後にした。

~~~~~

「…これが僕たちの得た情報だ」

ミーティアさんが私達が南の研究施設で得た情報をまとめる。私達も相当にショックを受けた内容だ。向かい合うサンダルフォンさん、ハイドロハンズさん、アムドラヴァさんも悩まし気な表情浮かべる。

「それはひどい話だな」

「ああ。それにしてもウルトクリスタルか。あれは俺達自身でも発生条件がよくわかっていないからな…」

「だけど、居場所が分かったのは大きいな」

「ああ。だが…問題はまだある」

アムドラヴァさんが私とミーティアさんをお互いを見る。なんだろう。

「俺とハイドロハンズの得た情報によるとリフィルはここ数日でヴィランを焼き付けて回ってやがった。しばらくはヴィランが街のあちこちで暴れまわることになるだろう」

街でたくさんの戦闘が起こる。おそらく狙いとしては、ウルトクリスタルの発生条件がわからないからとりあえずたくさんの戦闘を引き起こそうとしている、ということだろうか。

「俺達はおそらく鎮圧に全戦力を投入することになる。だからこそ、リフィルの討伐はミーティアスとロックピツカーの二人に任せることになるだろう。問題あるか？」

サンダルフォンさんは私達をに問いかける。問題？あるわけがない。ミーティアスさんと目が合い、頷きあう。

「全く問題ありません!!」

「よろしい。突撃は明日だ。十分に準備をしてくれ。今日は解散だ」

いよいよ明日、決戦。決意を胸に部屋を出る。

「ロックピツカーちゃん、これからどうするつもり？」

「おじ様を訪ねようと思います。もし明日リフィルを未来に連れ帰ることになったら、もう会えなくなってしまうから」

寂しい。分かっていたことだ。私とリフィルは本来この時代にいる人間。おじ様やミーティアスさんとうろして関わっていることが異常なのだ。

「…そうか。行っておいで。ただ、僕たちは君の事を十分に信頼しているし、既に仲間だと思っている。君がこの時代に残ると言ってもみんな受け入れるつもりだよ。それでも君は未来へ帰るかい？」

「はい。私にも未来に残してきた仲間がいるので」

「そうか。残念だけど、わかったよ。引き止めてごめんね。行っておいで」

「はいー!」

思えば、ミーティアスさんは私この時代に来てからずっと私のことを気遣ってくれてたな。ミーティアスさんだけじゃない。サンダルフォンさん、ハイドロハンズさん、アムドラヴァさん、そして、おじ様。この時代で色々と迷惑をかけてしまったけど、それも明日までなんだ。

「おじ様!!」

勢いよくおじ様の部屋に入る。返事は聞こえてこない。

…なんだ。いないのか。

「…私、頑張るから」

誰もいない部屋に呟いて部屋を去る。昨日のシチューの香りも

う漂って来なかった。



## 9話

あちこちから煙が上がっている。戦闘音もたくさん聞こえてくる。各地でヒーローとヴィランが戦い始めたのだろう。そんな中を私とミーティアさんは全力で走り抜ける。

「作戦は前回と同じだ！障害には極力二人で対処するがどちらかが進める場合には君が優先して進んでくれ！」

「わかりました！」

少しずつ郊外へと出て来て周囲に自然が増えてくる。これなら私もあまり街への被害を考えずに暴れられそう。私達はスピードを緩めずにリフィル未来から持って来たのであろう未来の警備ロボ達を破壊しながら突き進む。

「鬱陶しいなこのロボット。未来ではこんなのがわんさかいるのかい？」

「そうですね。一応未来ではかなり一般的な防犯ロボです。まあ相当な富豪でもなければこれだけ大量には持っていませんが」

「全く。未来の技術とは厄介なものだ！」

とは言いつつこの人さつきからロボットを倒すのどんどん効率化されていていつてるの凄すぎる。それにしても、ロボット増えてきたな。段々進行ペースが落ち始めてる。

「面倒だ！ショートカットするよー！」

「えっ、どうやって……うえああ!!何を!!」

目の前のロボを倒したところで急に後ろからミーティアさんに抱きかかえられる。ミーティアさんは私の倒したロボットを踏み台にして飛び上がって、

「『スターロード』!!」

そのまま空を駆ける。五秒間限りのショートカット。渋滞をおこすロボの上空を猛スピードで走り抜けていく……っていうか空中で抱きかかえられているってちよつと恥ずかしい。

「すまない。ショートカットはここまでだ」

「十分です。かなり近づきました！」

後ろを振り返って短縮した距離を見る。実際かなり短縮したよう  
で、後ろにはかなり大量のロボがこちらを向いている。つまり…

「後ろを気にしたって仕方がないよ。どうせもともと後退するつもり  
はないんだ。逃げ道なんていらないさー!」

「はい!」

退路は断たれたが、元より要らないものだ。改めて前を向き、斧で  
ロボを薙ぎ倒す。もうすぐ。もうすぐでたどり着く。

「危ない!!」

ミーティアさんの声に反応してとっさに斧でガードする。衝撃  
が走る。一体何なんだ。何に襲われた。少なくともその方向には口  
ポットはない。ただ鬱蒼と植物が生い茂っているだけ。一度立ち  
止まって周囲を警戒する。

「右だ!!」

すぐに右を見ると、まるで誰かが操っているかのようにひとりで  
動き回る植物が私を襲おうとしている。

「せえい!!」

迷わず斧で迎撃する。

「何これ!?!植物を操る技術なんて未来でも聞いたことない!」

「…いるんだよ。この時代には一人だけ。植物を操る能力を持つ奴  
が」  
サイラン

ミーティアさんが視線を大量のロボットの壁の向こうへと飛ば  
すので、つられて目をやるとソイツと目が合う。

「紹介するよ、ロックピッカーちゃん。コイツはこの時代の厄介な  
ヴィランの一人。ユグドライアだ」

人の形はしているがどこか不整合さを感じさせる半人・半植物とも  
言えるその見た目。この違和感に満ち溢れた雰囲気の正体を私は  
知っている。リファイルと同じ、改造人間特有のものだ。

「フフ…あの流星ミーティアスに厄介と言ってももらえるのは光栄ね」

「褒めてないんだよ全く。どうしてお前がここにいる?」

「ただ、始めて同類改造人間の子を見つけてね。親近感湧いちゃって。あの子  
を邪魔する奴が気に食わないのよ。だから、潰すわね!」

再び私とミーティアさんを狙って植物が舞う。コイツはかなり手間取りそうな相手だ。ここで二人共足止めをされるのは下策かもしれないな。

「コイツの相手は僕がする！君は先に進むんだ！くれぐれもコイツの『罨種子』トラップシードには気をつけてくれよ！」

「わかりました!!」

どうやらミーティアさんも同じ事を考えていたようだ。迷わず私はユグドライアの横をすり抜けようと走り出す。

「行かせるわけ無いでしょ!!」

目の前で植物が即興の壁を形成する。かなり頑丈そうだ。だけど、それじゃ止められない。

「フルクラッシュ防火斧・超破壊モード!!!」

物騒な音を立てながら変形し、赤く光り始める私の斧。これだけのエネルギーがあれば植物の壁なんて簡単に破れるでしょ。

「セエエイ!!」

大きな爆音を立てて壁が消し飛ぶ。

… ありがとう。ミーティアさん。

後ろに残したミーティアさんはユグドライアと今もなお戦っている。だから、私がリフィルを止めるんだ。壁に開いた穴を走り抜け、そのまま建物内に入る。ユグドライアを超えてからロボットはほとんど出てこなくなった。これなら楽に進める。

スタジアム型をしているこの建物は入り口にさえ入ってしまえばすぐに内部へとたどり着ける。中を見ると、中央にリフィルがひとり立っていて、そのはるか上空に光り輝くナニカがある。おそらくあれがケイオースキューブだろう。かなりのエネルギーが溜まっているように感じる。

「よお。来ると思ってたぜ。ユグドライアはどうした」

「彼女なら外でミーティアさんと戦っているわ」

「そうかよ」

リフィルと向かい合い、言葉を交わす。これまでコイツとはいろいろあったようにも感じるが、この時代に来てから一対一で向かい合っ

て話すのは初めてだ。最後にまともにコイツと会話をしたのは未来でのこと。コイツの時間移動の直前。コイツの姿は、その余裕を伺わせる表情や態度は、その時と重なって見える。

「だけど、私はあの時とは違う。」

この時代に来て、ミーティアさんやサンダルフォンさんの考え方に触れて、おじ様に硬い決意を貰って、私は変わったんだ。

「ねえリフィル。ちよつと話しましょう?」

「は?何をだよ気持ち悪い」

「南の研究施設に乗り込んだとき、色んなデータを見たわ。リフィル計画の事も、死んでいったお仲間の事も、No.43の遺言の事も」

リフィルの表情があからさまに歪む。

「で?どうした?同情でもしたか?上から目線の安っぽくて押し付けがましい同情なんかいらねえぞ」

「同情なんてするわけじゃないじゃない。あなたの過去に何があったとしてもこの時代に来てからしたことが間違っている事に変わりはないんだもの」

「んで?どうすんだよ」

「もちろん。止めるわよ」

「やってみろよ、ヒーロー風情が」

「ええ。そうさせてもらうわ」

私は斧を、リフィルはブラスターを構える。

そして、最後の戦いが、始まる。

## 10話

また一人死んだらしい。

これで37人目か。

いや、計画開始から数えれば115人目だな。

残りは12人。

俺も死ぬんだろうか。

俺は弱いもんな。死ぬよな。

そういえばこれ強くなるための実験なんだっけ？

まあ関係ねえよな。

俺は弱い。

科学者共は強い。

だから俺は殺されるんだ。

死ぬんだ。弱いから。

クソ。誰にも負けないような強い奴になりたかったなあ。

……あと11人。

どうせ死ぬなら早く殺してくれ。

……あと10人。

もういいだろ。俺頑張っただろ。

……あと9人。

もうすぐ死ぬ。もうすぐ死ぬ。

……あと8人。

なぜまだ死ねない。俺は弱いのに。

……あと7人。

苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。

……あと6人。

もう楽にしてくれよ。

……あと5人。

もしも俺がもっと強かったなら、

……あと4人。

こんなにも虐げられずに済んだのだろうか。

……あと3人。

もし来世があるなら、もっと強くなろう。

……あと2人。

もうそろそろ死ぬるかな。

……あと1人。

ついにあとは俺だけか。やっと死ぬるのか。

……あと1人。

なぜ死ぬらない？俺は弱いだろう？

……あと1人。

死ぬらない。俺は弱くないのかもしれない。

……あと1人。

体が軽い。生まれ変わったようだ。

……あと1人。

俺は、死ぬない。死ぬないんだ。

……あと1人。

俺は、強い。

だから、死ぬない。

~~~~~

「本当にあんな娘一人行かせてあの子を止められると思ってるの？」

さあ？そんなこと僕に分かる訳がないだろう。

「厳しいかもしれないね。彼女一人じゃ」

「なら、なぜ行かせたのかしら」

「ロックピッカーちゃんはこの数日で間違いなく一番成長した。つまり、僕が行くよりもリフィルが相手の実力を見誤って油断し、全力を出さない可能性が高い。アイツは相手が格下なら手を抜いて余裕を持つタイプだ。それで長引くなら、その間に僕が君を倒して合流すればいい」

実際、僕が行くと最初から全力の可能性が高い。僕は一度リフィルに負けているものの、かなり追い詰めはしただろうからね。

「フン。意外とあの子のことしつかり見ているのね。それにしても、

私を倒せる前提で話すのは気に食わないわね。不愉快だわ」

「怪我也完治したからね。今なら誰でも倒せそうな気分だよ」

「気に入らないわ。潰す!!」

植物が踊り狂う。避けることは容易い。しかし、そうも行かない。厄介なのはむしろ『罨種子』トラップシード。踏むと爆発するタイプの設置罨だ。『スターロード』が使えればすぐにでも勝負に出れるが、さつき使ったばかりだからしばらくは使えない。

「潰れなさい!」

迫り来る蔦や葉をいなしながら、すばやく、しかし慎重に距離を詰める。

「うるあ!!」

「効かない!!」

全力のパンチも周囲のロボットを盾にして防がれる。一度距離をとるとすぐに大きな蔦が鞭のように唸る。

「厄介だな...」

相手に手数で劣っている。ならどうするか? もつと速くなるしかないだろう。今までだってそうやって強敵と戦ってきたんだから!!

「流星を... なめるなあ!!!」

迫りくる蔦をいなし、大きく踏み込む。足元に違和感がある...

『罨種子』トラップシードか!

「吹き飛びなさい!!」

「まだまだア!!」

大きく横に飛んで衝撃を逃がすと、そのまま大きく回り込んで至近距離に潜り込む。ユグドライアが素早く盾を構えるが、そんなことは予想済みだ。一瞬タイミングを遅らせて回し蹴りの放つ。

「.....!!!」

来ると思ってた攻撃が来ずに訝しみ、ロボットの影から顔を出したユグドライアと一瞬目が合い、その顔が驚愕に染まる。そのこめかみに、僕の回し蹴りがクリーンヒットする。さすがのユグドライアも硬直を免れられない。蹴り上げて体を浮かせる。

「…クソガア！」

悪態づいたところで空中に浮いて死に体になった体では抵抗のしようがない。蹴りによるコンボをつなぐ。このまま倒し切ってしまいたいが…

突如地面が爆発する。

大きく後ろに飛んで爆発のダメージをそらすのが、ダメージは入る。くそ、攻めきれない。肝心なところで『罨種子』<sup>トラップシード</sup>が邪魔をする。

「調子に乗るんじゃないわよ！『茨の楽園』<sup>ソーンランベージュ</sup>！！」

突如地面が揺れる。そして至るところから現れた茨が僕を包み込もうとしている。

「…マズいッ！」

対応が間に合わない。どうにか逃れるための道筋を探すが、前後左右どこを見ても抜け出せそうにない。

「クソっ！！」

何かないのか！何か！

気がつくのと、目の前にソレがあった。

加速した思考で考える。なんだこれは。確かに今の今までそこには何もなかった。突如として現れたソレは青白く光り輝きながら膨大なエネルギーが秘められていることを感じさせる。

……ウルトクリスタル!!!

迷わずに手に取る。すると、キューブの中のエネルギーが体に流れ込んで来るようで……

『スターロード』!!!」

「は??なんで?!?!」

迷わず唯一の逃げ道であった上空から脱出する。

「3秒で決める!!」

そのまま虚空を天地逆さまに踏みしめ、ユグドライアへと殴りかかる。ユグドライアは無防備に殴られこぼしたもののまだ笑みを浮かべている。わかっているさ。このまま僕が着地をすれば『罨種子』<sup>トラップシード</sup>の



餌食になると言うんだらう？

だから、着地の直前に空中に足をつく。

ユグドライアの顔が焦りと驚きに支配される。『罨種子』トラップシードは地面に足をつかなければ一切驚異ではない。

「これで終わりだあ!!」

「クソガアアアああああアアア!!!」

ユグドライアの鳩尾に僕の飛び蹴りが炸裂する。この感触なら、しばらく起き上がることもすらできないだろう。地に伏すユグドライアはピクリとも動かない。

「…… 教えなさい。なぜ使ったばかりの『スターロード』がつかえたの?」

「ウルトクリスタルが、突如僕の前に現れたんだ。あれがなかったら危なかったな」

「フン。運がいいわね。それであなたはあの子の邪魔をしに行くの?」

「ああ」

「あなた達みたいになんどの努力もせずに能力を得たあなた達には私達改造人間の苦しみは分からない!!これ以上あの子を苦しめるのはやめなさい!!!」

改造人間だから苦しめるな? 納得できないな。

「僕にとっては君らが改造人間かどうかなんてどうでもいい。君らのすることが間違っているから邪魔をするんだ」

「そんなのは上辺だけよ。みんな私達改造人間のことを疎んで遠ざける。私達は強くないとすぐに虐げられる。私達は強くないと行けないんだ!!」

知らねえよ。そんな事情。

「強くなりたいなら修行を積みばいい。実践経験を増やせばいい。他人に迷惑をかけてする事じゃないんだよ。君らがその方法を貫く限り、僕らはまた邪魔をするだろう」

急いでロックピッカーちゃんを追おう。思ったより時間がかかってしまった。スタジアム内部へと入る。

彼女は無事だろうか。

## 11話

意識を集中する。あのブラスターから放たれる弾は未来でも危険指定されているもの。重装備のおじ様ならともかく、私は喰らえばひとたまりもない。

「死ねえ!!」

リフィルの撃った弾を横つ跳びで躲し、すぐさま距離を詰める。至近距離での射撃はしやがんで躲す。ミーティアさんによれば、射撃の衝撃を逃がすためかは分からないが、リフィルにはブラスターを撃つときに自分の肩の高さと同じ高さのラインに撃つ癖がついているらしい。あからさまにしやがんで躲してばかりいると下を狙われてしまうだろうが、勝負に出たとき、しやがむと確実に躲すことができ、チャンスを作ることができる。相変わらずミーティアさんはリフィルのことをよく観察している。

「防火斧・超破壊モード」!!」

「チイツ…」

さすがのリフィルもこの火力は耐えられない。大きく後に跳んで躲す。もちろん想定済みだ。

「防火斧・穿砕モード」!!!」

斧の刃が突如収納され、取っ手のみになった斧が突如として伸びる。その先は新たな刃がついていて、斧は槍へと変化する。前に踏み出しながら槍へと変化するこの武器は、後ろに跳んだりフィルを捉える。

「…ウガッ!!」

一撃で致命傷になってもおかしくない完璧なタイミングの攻撃ではあったが、ギリギリで攻撃箇所をずらされる。それでもかなりのダメージが入ったはずだ。反撃のブラスターを避ける。

「まだまだっ!!」

一度距離を取られてしまうと弱い。というのも、槍という武器の最大の利点であるリーチは対近接武器で最も力を発揮する。それでも斧よりも長いリーチを活かして中距離からの薙ぎ払いを繰り返すが、

中々当たらない。やはり最初の一撃で倒しきりたかった。

「所詮は不意打ちしかできない雑魚か!!」

「そんなことない!!」

薙ぎ払い主体でヒットアンドアウェイを試みながらタイミングを測る。やはりほとんど攻撃が当たらない。ブラスターの牽制が鬱陶しくてたまらない。

「そこだあ!!」

思い切り振りかぶった槍を投げる。ただリーチの長い槍だつて投げてしまえば他のどの近接武器よりも殺傷力のある投擲武器になる。

「当たるかよお!!」

避けられる? そんなのはわかってる。速度なんてブラスター弾よりもずつと遅い。だけどこの一瞬の隙を作れたなら十分だ! 一瞬で距離を詰める。避けた体勢からはブラスターは撃てない!!

「私を... なめるなあ!!」

接近した勢いでサブミッションをキメつつブラスターによる反撃を封じる。そのまま全身に未来から持ってきたC4(いりよくがすごい)を張り付けて離脱する。

『強制解錠』!!」

起爆!!!

轟音とともに砂煙が立ち上がる。姿が隠れている間に槍を回収し、視界が晴れたタイミングに備える。砂煙の中から現れたのは、

.....  
片膝を付きながらもレーザー砲を構えるリフィルの姿だつた。

「しまっ...」

『冥土の宴』アア!!!」

予備動作が見れたわけではない。完全に不意をつかれたタイミング。回避はできない。

ああ。だめだこれ。

来たるべき衝撃を待つ。

轟音が鳴り響き、再び辺りが爆炎に包み込まれる。

目の前に広がる炎の海を見つめながら.....

って待って、なんで私は生きてるの??  
その時、炎の中に人影が見える。

その後ろ姿はあの日の光景と重なって見えていて。  
徐々に姿が露わになっていく。

「…誰だてめえ!!!」

そこから現れたのは…

「俺様は…いや、俺様がカーストプリズンだ」

私の<sup>お</sup>憧れの<sup>じ</sup>ヒーロー<sup>様</sup>だった。

言葉が出てこないが、必死で絞り出す。

「…おじ…様…どうして…」

「ああ??どうしてもこうしてもねえよ。俺もコイツに借りがあんだよ。だから来た」

ああ。結局この人はヒーローなんだな。そのことが嬉しくて顔が熱くなる。

「てめえ!!なんで無傷なんだ!!その盾は何なんだよ!!!」

「これは俺様の数少ないへそくり、ロケットの先端部分だ。少なくともこの時代においては最も硬い金属でできている。未来ではどうか知らんがな」

ロケットの先端…ウルツァイト窒化ホウ素。未来でも十分に希少な金属だ。なんてものを持ち出してるんだろうか。全くこの人は。

おじ様の隣に立って槍を構える。

「ありがとう。おじ様。助けてくれて」

「礼なんかいらねえ。またお前のシチューが飲みたくなった。だから助けた。それだけだ」

「…ふあえ?」

ちよ…ちよああ?!?待って待って待って…そそ…それって、まさ、まさか……プツ…プロポ…

「…いや、ちよつと落ち着きなよロックピッカーちゃん。なんて顔

してるのさ」

「ふええ?？」

そ… そりゃあ毎日おじ様にシチューを作ってあげるっていうのも悪くはないけど… ってあれ? ミーティアスさんいつの間にかここに来たの?

「… 遅くなったのは申し訳ないけど僕これ来なかったほうが良かったのかな…」

「当たり前だろ。てめえなんていらねえんだよクソミーティアス。足引っ張つたらぶつ殺すぞ」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ。『脱獄』あつさり封印されやがって」

「問題ねえよ… おいガキンチョ! 開けられるんだろ? この鍵穴」

おじ様が不意にこつちを向いて尋ねる。正直、あまり自信はない。

「分からない。でもいいの? 余計なことすんなって言ってたのに」

「ああ。俺様は今コイツを殴りたい。だからコイツの加速に追いつく必要がある。だから今はいいんだよ」

「分かった。少し時間をちょうだい? ミーティアスさん、少しでいいので時間を稼げますか?」

「任せてよ… さてリファイル、戦いを仕切り直してもいいかな」

「ああ。もういいぜ」

リファイルを見ると、さっきの『強制解錠』の傷がほぼ癒えている。この茶番の間に回復してしまうのは改造人間故なのか。

「それじゃあ、始めようか」

第二ラウンド、始まる。

## 12話

「それじゃあまず、この鎧の鍵穴を探すところからね」

「分かった。どうすればいい」

ミーティアさんは既にリフィルと戦い始めている。こつちの邪魔にならないように常にリフィルの反対側の位置取りを維持し続けているのは流石と言う他ない。

『ブリズンブレイク脱獄』するときをイメージして」

鎧の中をエネルギーが駆け巡る。エネルギーは一点を目指して集まり、唐突に滞る。なるほど、ここつまりからエネルギーを引き出せばいい訳だ。

「オツケー。じゃあ、ちよつと集中させてね」

おじ様は何も言わない。それが信頼されているのか期待されていないのかは分からない。でもおじ様のために力が使える。それだけでとても嬉しかった。

「…ふうう」

エネルギーの淀みを散らしながら鍵穴に意識を集中させる。かなり強引に固められているが少しずつ淀みが薄くなってきた。

『強制壊錠』!!』

これは私の持論なのだが、万物は鍵穴を持っているのだと思う。その鍵穴を開けて道筋を作り、エネルギーを循環させることでその物の本当のポテンシャルを引き出すことができる。これがその『強制壊錠』っていう技。ただし、この場合は開いた鍵穴から鎧中をエネルギーが駆け回り……

おじ様の鎧が弾け飛ぶ。

「…よくやった。ガキンチョ」

戦っている二人を見据える。ヒーローでも随一のスピードを誇るミーティアさんと『アクセル加速する蹂躞』を使用したリフィルの戦いは既に認識の限界に迫るものになっている。でも、それを前にしても笑顔で殴り込もうちするおじ様が、圧倒的なまでの存在感を放って自己主張をするブリズンブレイカー緋色の凶星が、きつと最強なんだ。

「おじ様、頑張ってるね。これが終わったらまたシチュー作ってあげるから」

「… 任せておけ」

おじ様は一言そう言って戦場へと駆け出す。

「オラア!!俺様も混ぜやがれ!!!」

「クツツ…… 面倒くせえなあ!!」

私はあの戦いには混ざれない。きつと足を引つ張ったしもうから。情けない。悔しい。もつと強かったら良かったのに。外から見ているだけで悔しさがこみ上げてくる。

「そんな顔しないでいいんだよ、ロックピツカーちゃん。君は君の役割を十分に果たしたんだ。決して君は弱くなんかないよ」

私のそばまで退避してきたミーティアさんが声をかけてくる。

その傷だらけの体を見ると、私の弱さを痛感させられるようだ。

「いいかい？僕たちは勝つ。君のおかげで勝つんだ。だからそんな泣きそうになってないで君が力を託したヴィラン<sup>ヒコロ</sup>を信じて待つてなよ」

「でも… 私は…」

「いいんだよ。戦闘は僕らの領分なんだ。あとは任せなよ」

「…… はい… お願いします」

「ああ」

最後に私の頭を撫でて洗浄に戻る。おじ様も、ミーティアさんも、私よりはるかに強くて、大きくて、かっこいい。

「私もいつか、あんなヒーローになろう」

そんな決意を胸に戦場に目をやると、機械じかけの悪魔が、蒼色の流星が、緋色の凶星が、光り輝いていた。

「お待たせ!!プリズンブレイカー!!リファイル!!」

「待つてねえよクソミーティアス!!まあいい、そろそろ決めるぞ!!」

「てめえら…… 揃いも揃って調子に乗りやがってえええ!!!」

流星はプリズンブレイカー。そのスピードは三人の中でも頭一つ抜けていて、リファイルとミーティアスさんすらも困惑してしまっている。

「オラア!!遅えぞてめえら!!」



「僕は、まだまだだあ!!」

「フツぎけんなあ!!」

リフィルの射撃を躲しながら接近するおじ様とミーティアさん。その攻撃もリフィルは避けて、再び射撃を再開する。その超スピードの攻防の中、おじ様が急に立ち止まり天を指で指し示す。

「お前らあ!!この空が誰のものか知ってるか!」

「何言ってるんだてめえ?!」

再びリフィルに急接近したおじ様の一撃に合わせてリフィルは身をよじる。しかし、おじ様は突き出した手を引かずにそのまま掴みかかり、リフィルを上空へと投げ飛ばす。

「んなツ!!」

それに合わせておじ様も飛び上がり、虚空を踏みしめて強烈な飛び蹴りを食らわせる。そうだ。そもそもおじ様はミーティアさんのオリジナルとも言える存在。ミーティアさんの力が使えない道理はない。

「まだまだ続くぞお!!」

そのまま空中での跳躍を繰り返して連撃を加える。殴ること20連撃。地面が近づいてくる。

『Asterisk  
星 天』!!!」

「負けて……!! たまるかあ!!!!」

それはきつとりフィルにとっても限界を超えての反応。最後の意地。その脳天を狙う踵落としを受け止める。仕留めきれてない!!

「いや、てめえは負ける。だってそうだろう?いつだって最後に勝つのは……ヒーローなんだからな。だろう?!ミーティア!!」

リフィルの背中越しに見えたおじ様の笑み。その奥で蒼い流星ミーティアさんが光り輝く。リフィルの顔が衝撃に歪んだ。

『ミーティア・ストライク』!!!」

その蒼白の光はまるで本当に空から降ってきた大きな星のようで、本当に綺麗だ。思わず見とれてしまう。そしてその悪を滅ぼさんとする流星は空を駆け、着弾する。

そして光の中から現れたのは、決めポーズをとっているらしいミー

ティアスさんと、ギリギリのところまで回避していたおじ様と、地に伏して動かないリフィルだった。

「・・・勝つ・・・たの？」

「ああ。勝ったよ」

「・・・勝ったんだ。」

なんだか実感がわからない。それでも安堵からか笑みがこぼれてしまふ。

「おいミーティアス。てめえ最後俺様ごと狙っただろうが」

「まあ狙ってはいないよ。まあ巻き添えになってくれても全然良かったけどね」

「てめえ・・・」

「ていうかカースドプリズン、君の最後のセリフは何なんだい？ っいっただって最後に勝つのはヒーロー」って、君はヒーローじゃないだろうに」

「フン。うるせえよ」

どこか恥ずかしそうにしているおじ様かわいい。でもミーティアスさんも分かってからかっているのだろう。

「おじ様は今日は完全にヒーローだったもんね。まあ私にとってはいつでもヒーローだけど」

「ほっとけ」

そう言い捨てたおじ様は、いつもどこか違って見えて、それがなんだかとても嬉しく感じた。

## 13話

「おじ様ももうすぐできるからね〜」

「おう」

今、私はおじ様の家で約束のシチュー作りをしている。

「はあー。私幸せ」

「そりや良かったな」

うーんおじ様がそっけない反応しか返してくれない。でもおじ様のために料理をしているこの状況が幸せすぎるので十分だ。今はこの幸せを存分に堪能しよう。

「今日のメニューは私特製のグレイビーソースハンバーグに私特製のポテトサラダ、私特製のクリームシチュー!!」

「…無駄に張り切りやがって」

おじ様が食べるんだから無駄じゃないもん。もう少し労ってくれてもいいのに。

「お前俺様の嫁にでもなったつもりか？100年早えぞ」

「嫁だなんてそんな!!むしろ…娘?」

やっぱり自分でもこっちのほうがなんかしっくりくる。そうだ。

いいじゃん。おじ様の娘ポジ。

「こんなガキいらねえ」

「そんなこと言わないでよ傷つくなあ」

出来上がった料理を運ぶ。なんかこの行動はむしろ嫁っぽいな。嫁も悪くないかも。

「余計なこと考えてんじゃねえぞ」

「はあい」

ありや、バレてるじゃん。

「冷めないうちの食べてね」

「…おう」

「いただきます」

おじ様が何も言わずに食べ始めたので私も食べ始める。うん。我ながらなかなかの出来だ。

「どう？美味しい？」

「ああ」

素直に褒めるなんて珍しい。そんなに気に入ったのだろうか。

「ふふっ」

「・・・なんだよ気持ちわりい」

「なんでもないよ」

・・・ 神様、この街の場合は全能存在ギャラクセウスが神様って事になるのかな？まあいいや。神様、どうかこの幸せな時間を、いつまでも私に堪能させてください。私は今、とても幸せです。

~~~~~

結論から言うと、私は未来へは帰れなかった。

あれから意識を戻さないリファイルは今も病院でサンダルフォンさんが面倒を見ているらしい。リファイルの拠点だったスタジオムや、他にリファイルが使用していたと思われる施設も全て調べたが、時間移動に関するデータは全てが破壊されて修復不可能な状態だった。修復を試みた技術者もいたようだが、それは未来の技術の産物。当然であるが、不可能だったようだ。

結果としてこの時代に残れる事になったわけだけど、やっぱり未来に置いてきた人たちの事を思うと寂しい。まあこの時代に来たのだから元はと言えば私の独断先行が原因だったのだから自業自得と言ってしまうまでもない。

結局この時代に来て仕事もない私はミーティアさんやサンダルフォンさんの紹介で正式にこの時代でのヒーロー活動を始めた。とは言っても基本的には雑用やアシストばかり。戦闘能力も低いわけではないのだが、この時代のヒーローたちには遠く及ばないので、今はミーティアさんの訓練を毎日受けている。未来の技術に頼り切ったの戦闘をしていた私だったが、自分自身の能力の向上が感じられて来る。最近ではヴィランと戦うことこそないものの小さな事件の解決程度なら任せてくれる事も増えてきた。ミーティアさんたちには混じって実戦をこなす日もそう遠くはないだろう。

その後私は病院暮らしをついにやめ、一人暮らしを始めてみた。ちなみにおじ様の家まで徒歩一分。最近はずいぶんおじ様の家にご飯を作りに行っているくらいだ。…まあヒーロー活動をしながらヴィラの家に通うって言うのも変な話だが。

ちなみにミーティアスさんよれば最近おじ様による街の被害が極端に減ったらしい。その根本原因が私にあるのかは分からないが、ミーティアスさんは私のおかげだと言っている。全然そんなことないと思うけどなあ。

そういえば、ミーティアスさんがこの間お酒を持っておじ様をとてもフレンドリーに訪ねたらしい。まあ当然追い出されたようだが。この二人もいつか和解できる日が来るのだろうか。ミーティアスさんには二人の仲を取り持つてほしいと言われてるが、当分は無理だろうと答えるとともに悲しそうな顔をしていた。

まあそんなこんなで私はこの時代を満喫しているのだった。

~~~~~

今日も訓練を終えて帰路につく。最近は何だかミーティアスさんも少しづつ厳しくなっている気がする。正直体がキツイ。

「ふう。疲れた日はやっぱりこれだよな」

左手に提げた袋に入った大量のアイス（栗きんとん味）の中から一本を取り出して頬張る。うん。相変わらず美味しい。

「今日のメニューは何にしようかな…」

冷蔵庫の中身に思いを馳せる。今日は鶏肉が余ってたつ。なら照り焼きチキンだな。これは最強の鶏肉料理。異論は認めない。途中でスープパーに寄り、足りない材料を買い足していく。

「2940円になりあす」

「はい」

うう。厳しい。最近お金セーブしているのになかなか厳しいな。もう少し余裕があると思ってたのになんでこんなに厳しいんだろ。う……アイスじゃん。アイス買い過ぎなだけじゃん。でもこれはやめられないので仕方がない。アルバイトでも探そうかなあ、でも

やっぱりサンダルフォンさんに言われたとおり着実にヒーロー活動  
を続けて昇給を待ったほうがいいのか。これからどんどん忙しく  
なるだろうしなあ。

「ありやあとおっざいあしたあ」

スーパーを後にした私は帰宅して調理の準備を始める。せっかく  
お肉たくさんあるしこれはおじ様におすそわけかな。そうと決まれ  
ばたくさん作ろう。

「♪♪♪」

思わず鼻唄が漏れる。最近はおじ様のために料理をしている時間  
が至福の時間だ。料理の腕もどんどん上がっている気がする。

楽しい時間もあつという間に過ぎてしまうもので、もう完成してし  
まった。早速おじ様の家に持っていこう。

「ほんとおじ様の家が近いって便利だね」

冷めないように容器に移しておじ様の家に行く。

「お邪魔しまーす。おじ様いるー?」

返事はない。今日も留守だろうか。

「もう…… あ、ふふっ」

中に入るとおじ様が居眠りをしていた。鎧で隠れて寝顔こそ見え  
ないがその雰囲気既に可愛い。鎧のせいでその見た目は全く  
可愛らしくないが。

おじ様を起こさないように料理を準備していく。部屋の中にだん  
だんといい匂いが立ち込めてきてなんだかお腹が空いてくる。

「なんだこの匂い…… お前か」

「あ、おじ様おはよう。でももう夜だから全然早くないよね」

「フン。ほっとけ」

「じゃあ早速で悪いけど、食べようか。私お腹空いた」

「…… ああ」

「いただきます」

私の幸せな日常はこうして続いていくのだった。

おわり